

日本は「子育て罰」の国？ マタハラ、高い教育費…研究者も悩んだ

有料会員記事

聞き手・中井なつみ 2021年11月6日 16時00分 コメント3件



「子育て罰」という言葉を知っていますか？ 2児を育てる記者(34)も、最初に目にしたとき、どきりしました。子育て世帯に冷たい日本の政治や制度、社会意識を「子育て罰」と名付けたものですが、重い言葉の裏にはどんな思いが込められているのでしょうか。「子育て罰」を研究し、発信する 日本大学の末富芳(かおり)教授(教育行政学)に話を聞きました。



——研究対象として「子育て罰」に興味をもったきっかけを教えてください。

もともとは、日本の教育費負担の高さに疑問を持ったことです。今は日大の教授をしていますが、そこでも「経済的に苦しい」という学生にたくさん出会います。

「大学に行けているのに……」という声もありますが、よくよく話を聞くと、生活保護を受給できるレベルの家庭の学生もいます。今では、学生の家庭の経済的な苦しさは、年々深刻になっていると感じます。日本では学費の補助が限定的で、大学に行くのが苦しい先進国のひとつです。

——ご自身が2人のお子さんを育てていて、「子育て罰」を感じた経験はありますか？

たくさんあります。それこそ、妊娠中からハラスメントを受けました。

妊娠を告げ、業務の相談をしようとしたら、すぐに別室へ呼び出され、「困る」ということを告げられました。子どもを産んでからも、育休制度が十分でなかったり、夜遅くまで働けないことで肩身の狭い思いをしたり……。外出中にベビーカーを蹴られたこともあります。

子どもを育てるうえで、社会の中でつらい経験をするのも、「子育て罰」の一種だと思っています。

もちろん、経済的な負担も大変でした。2人の子どもは4歳差ですが、保育料無償化の恩恵を受ける前だったので、月々の負担は認可園でも10万円ほどでした。

保育料は保護者の収入に応じた負担になっているとはいえ、0～2歳児の負担の大きさは異常だと思います。2019年からは、住民税非課税世帯について0～2歳児の保育料は無償化されていますが、そう

ではない世帯にとっては「何のために働いているのだろう……」と思ってしまうようなインパクトのある額ですよ。私も、そうした思いを抱えたことは一度や二度ではありません。

—— 保育料 はもちろん「子どもを育てるのにはお金がかかる」……というのは、日本では「親の責任」「当たり前」のようにとらえられているようにも感じます。

社会にある「親負担ルール」

そもそも、子どもを育てることについて、すべての責任や負担を親に求める思い込み、「親負担ルール」が社会の中にあることが、怖いことであると感じています。

保育料 や学費などの経済的な面はもちろん、子どもを健やかに育てることなど、今はすべてが「親の自己責任」ですよ。そんなプレッシャーを与えられた状況では、「子どもを持たないほうが合理的だ」という判断をする人が出てきてしまうことは、仕方がないことだとも思います。

少子化対策 といっても、現状では多くの子育て支援策に所得制限がついていて、「受けられる子ども」「受けられない子ども」が区別されている現状です。親の所得が高いからといって、子どもへの支援を差別することは、そもそもあってはならないと思っています。少子化を本気で解消しようという気がない、そんな政権の姿勢の表れだと感じています。

——無意識的に子育ては「すべて親がするもの」と考えていました。

それが当たり前だと考えている人は多いですよ。私は5年ほど前に祖母の 介護 が必要になり、介護 と育児の ダブルケア を経験したのですが、そのとき、介護 には子育てとまったく違うシステムができていることに驚きました。

介護 をするにあたり、どんな制度が使えるのか、経済的にやっていけるのか……。さまざまな不安があったのですが、介護サービス の紹介やお金の相談に乗ってくれる ケアマネジャー さんがいました。私が 介護 を乗り切れたのも、このケアマネさんにいろいろ教わるのができたから。このシステムは、育児に転用できないのかな……と切実に思いましたね。

——おっしゃる通り、(家族で)頑張らない 介護 、という言葉はあるのに、(家族で)頑張らない育児、というのはまだ気が引けるかもしれません。また、子育て罰という言葉で、「子どもを育てるのは怖い」というイメージにつながる懸念も感じたのですが。

「おかしい」 声を上げるべき

子育て罰の語源は、「child penalty」という言葉です。これを、立命館大学 准教授の桜井啓太さんが、「子ども罰」ではなく、「子育て罰」と訳しました。「子育てをすること自体に罰を与えるかのような、社会の厳しい冷たさを批判する」という概念を表しています。

子育て罰という言葉が発信した当初は、やはり強い言葉に戸惑ったり、反対したりする人も多かったと思います。でも、SNSなどの発信を通じて、「子育て罰は、子育てをしにくい世の中の構造的な問題だ」という理念が浸透してきたように思います。

私が訴えたいのは、子どもを育てる人、子どもを産み育てたいと考えている人たちに対し、今の社会が無意識にも冷遇していることが多すぎる、ということなんです。

——子どもを持つ人、子どもを持ちたいと思う人にとって今の状況は異常だ、と思ってもいいのでしょうか。

「子育てをしていることがこんなに冷遇されるのはおかしい」と言う声は、もっともっと上げていいと思っています。お金がかかりすぎること、子どもを連れているときに社会からの扱いが冷たいこと……。これらは決して「当たり前」ではありません。

当事者として「おかしい」と声を上げることが、これまで無自覚的にも子育て罰を強いてきた国、そして企業を変えるためのメッセージになり得ます。当事者が声を上げることで、現状を変えたい。そう期待しています。(聞き手・中井なつみ)

コメントプラス

[ほかの記事のコメントを見る](#) >




おおたとしまさ(教育ジャーナリスト)2021年11月06日16時57分 投稿

【視点】現在の社会では、「ケア」よりも「競争」が優先される。「ケア」は「競争」の合間を縫ってすべきものだと錯覚させられている。本末転倒なのだ。私たちの社会が直面している矛盾の根本…続きを読む



おおたとしまさ(教育ジャーナリスト)2021年11月06日16時57分 投稿

すべてのコメントを見る(3件) 

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.